つとこさと河岸の方へ引張寄せたんだが、水へ顛げ込んだ日にやア大變だから、上へ揚げるまでにやア隨分の苦勞だつたせ』。

此處まで話して一喫した。此の兒こそは說くまでもなく花子である。彼は伊三郎の手から離れて、扇に乘つた儘吹流され、下手の橋杭に食止められてゐる所を、運好く平右衛門に救ひ揚げられたのであつた。

『おや〳〵、那麼譯かね、まア』と婆さんは窪んだ眼の底に、金色の光をゆるがせて「厄介な捨ひ物をしたね、何處の小兒だらう、一体』。

『さア、それから家は何處だ、什麼してこんな所に流されたんだと、種々訊ては見たが、此の通りカラモウ齡のいかねね幼兒だらう、只シク〳〵泣いてゐるばかりで、さつぱり譯が解らねねのだ、連れて行つて遣りたくとも家が知れず、それに夜半の風雨最中と來てるもんだから、什麼することも出來やしねね、エ、仕方がない、今夜の所は家へ連込んでッて、明日になつてから寛々探すと爲よう、是も何ぞの因緣業だと思つて、負つて來てやつたやうな譯だが、俺の推了ぢやア、彼の近所の者だらうと思ふけれど、扉に乘せて流した譯が、一向合點がいかねね』。

眞箇に狐に魅まれたうやな、訝しな話だねね、如何する心算だよお前さん、こんな厄介物を拾つて來て、人間ぢやア眞逆燒いて食ふといふ譯にもいかないぢやないか、チョッ、仕樣がないねね。』婆さんは不平らしい顏で、燥つた衣裳を囑めてゐたが、此の風姿ぢやア、程餘豪屋の小兒らしいね、ちよいと觸つてお見、衣裳も帶も皆な縮緬づくめだよ、是れだけでもお前、二分や三分が物はあるぜ』と早や金目をふんでゐる。

『ドレ〳〵、どんな兒だか見て遣らう、ちよいと〳〵、佳い兒だ、此方へ寄んな』。嬌奢んてゐる花子を引寄せて、行燈の下にその顏を凝乎と見てゐたが『まア、奇麗な兒だことと』嬉しさうにニた〳〵と笑つた。『爺さん、結構な物をお拾ひだねね、オホ、、褒めて上げるよ、働き者だよ、お前さんは』。

（六十二）

平右衛門は佛性の老人だけに、花子に對して、何の野心も懷いてなかつた。多分新島原邊の小兒だらうと見當をつけて、翌日心あたりを尋ねて見る豫期でゐた。所が妻のお秀婆さんがそ

れを拒んだ。理由といふのは――此頃の不景氣續きに、商ひも思はしくない所へ持つて來て、昨日の時化、家の米櫃が瓦多つくのは知れてゐる。其の矢先に鑑一文にもならない事に關り合つて、可惜一日を潰して了うのは、莫迦の骨頂である。お前さんは構はずと稼ぎに出かけて腮の干揚らぬ工面をして來るが可い、此の兒の始末は私がつける、心配なく任してお置き――といふのであつた。

婆さんの前に於る平右衛門は、蛇使ひの手に鞠くる青大將のそれの如く、極めて柔順なるものである。金壺眼の陰險な光は、此の老夫を戰慄せしむる一種の威力を放つて、爪の垢ほどの問題にも、決して反抗的体度を取ることを許さぬ、平右衛門の待遇は座布團どころの程度ではない、敷くにあらずして足に突懸け、踏みつけること猶冷飯草履の如くであつた。爾も彼はその草履たるに甘んじて、嬶アの御用を勤むべく、土の上に摺切れてゐた。婦人を器械視した當時の社會に、此の婆さんのみは大なる女權家であつて、盛んに文明式を發揮したのである。

『むゝ爾か、それも可からう――老爺さんは被仰る通りに畏つて出て去つた。暮方に戻つて見ると、花子は依然として家に居る、什麼したと尋ねると婆さんの答が恁である――今日、此の子を負つて新島原の廓中を一軒ごとに聞いて廻つたが、根つから手懸が無かつた。若しや築地

か木挽町の方ではないかと、河岸を變へて搜しても見たが雲を摑むやうなのにうんざりして、ぶつくさ〳〵叱言を飜しながら戻つて來たと。

それでは町用係の會所へ屆けて出て町内預りにして貰はうぢやないか、と平右衛門が言出すと、それも私がやつてのけると婆さんは手もなく引承けた、翌日の報告は――今の政府になつてから御規則がからりと變つて、迷子なんぞは町内で預からないとさ、仕方がない、脊負込みだよ。

恁く聞いて見ると、一汐憫然である、貧しいながらも子供の一人ぐらゐは育て上げられぬことは無からう、軈て知れるまで手元にと、平右衛門は思つた。お秀も同じ心か、己が孫でもあるかのやう、目を懸けて可愛がる樣子。

是が婆さんの手段であつた、探すどころか、島原の方角を向いても見ないのだ、口から出鱈目の嘘八百に、体好く老夫を言訥めて、蔭では内々に或る運動を始めてゐた。

運動とは、花子を藝者家の下地ッ子に賣飛すことで、それから夫と蔓を求めては、桂庵の手にもかけて見たが、當時は政府に娼妓解放や人身賣買禁止の内議もあつた節柄、取締が嚴ましいので買入がつかぬ。それも町年寄や五人組の保證の判でも据ることなら、玉が佳いから直と

足が附いたのであらうが、元來秘密の仕事、公然に人の判を貰へぬ所から、折角の話も中途で打壞れて了ふ。

目算が狂つて見ると、振切のつかぬ厄介物である。そろ〳〵と邪魔になる忌々しくなる、顏を見ても腹が立つ、ねゝ這麽餓鬼は捻り潰しても、といふやうな氣になつた。

で、何かにつけて叱り飛す、打つ、蹴る、ふん縛る、灸を据ゑる、朝から晩まで窖り通し、平右衛門の留守の間は、此の廢屋に賽の河原の悲劇を繰回してゐた。

或の日も例の如くさん〴〵の折檻を加へてから、花子を裸にして柱に括しつけ、衣裳を引奪つて、ぷいと表へ飛出した、最も內から掛鍵を下して、臺所口から出て行つたのである。

日々の苛責に神經の衰弱した花子は朝からの絕食にいとゞ苦しさを加へて、ひい〳〵と腸を斷つばかりの聲を揚げ假つ反つ泣いてゐた。

その聲に聞つけて、少時戸口に佇んでゐた洋服打扮の男があつた。何か近所の者に尋ねてゐる樣子であつたが、その話に堪へられなくなつたと見ゐ、猛然として戸を蹴外し、狹い沓脫へ躍り込だん。

（六十三）

八丈島に溫泉がある。

それが不思議の浴場であるのだ。別に寬などで引くのではなく、家根も無れば外圍もない自然の儘の石槽、底から湧いて來る湯へ飛込んで、岩を枕に浪の音を聞きながら、近くに走る白帆を眺めることが能きる。百九十度の溫度が熱いと思へば、海水を堰入れて程好く加減する。湯が飽きたなら砂の上に匐揚つて、蒸氣浴と洒落ることも自由だ。

是は樫立村の海岸、小馬毛浦といふ磯邊に湧出す溫泉で、滿潮の時は海と一つらに隱れて了う、島人は退潮の時を以て浴る。此外三原山の威振谷を始め五六個所に散在してるが、効驗はいづれも似たもので、重に皮膚病に宜しい。

お駒はお梅と共に、大賀鄕村の漁師太右衛門といふ者の家に逗留することになつた。同行の乾兒は其の隣家に泊めて貰つてゐた。此事に就ては醫者の博庵老が、非常の盡力をして呉れた不案內の土地だけに、此人ばかりが賴みである。

生涯此の島に居殘つて、亡夫片桐と同じ墓に、その骨を埋めたいといふお梅の希望は、遂にお駒の容るゝところとなつた。勿論お駒から泌々と意見もしたのであるが、いつかな動く氣色がないので、止むなく其の意に任せ、自分は乾兒を引いて四五日中に歸帆することにした。でも別れ際に最う一度、歸京を慫めて見ようか、とも思つてゐた。

お梅は日に幾回となく墓詣りをしては、追懷の涙に身も擂せるばかりの懷をしてゐる。お駒は毎日案内者を連れて、元氣よく島めぐりの探撿を試みてゐた。

小馬毛の溫泉行をお梅に相談して見たが、一向に氣乘がせぬので、宿の太右衛門をガイドの役に、乾兒を伴つて我のみ行くことにした。それは恰ど此島に來てから四日目の朝である。

磯づたひに溫泉場へ辿り着いて見ると、今が引汐時の眞白く燥いた眞砂の上に、淺い手掘の穴をこしらへて、日影に背を晒したまゝ、その穴へ浸つてゐる島の女が三四人も見えた。それが一行の姿を認めると、喫驚して飛起き、慌てゝ衣裳を引かけて、黑髮を汐風に吹亂しながら松原の方へ逃散つた。後を見ると掘返した砂から醫沸と湯の珠が噴出してゐた。

『アハヽヽ、逃出しやアがつた〳〵醜体ア見やがれッ、アハヽヽ』。突然岩蔭から男の聲が聞えた。お駒は不審して其の方を凝視ると、海へ突出した岩礁の亂れ立つた中に、さながら堰入れた流のやうに一溜の溫泉が湧いてゐる、その濛々たる湯煙の紫ばんだ中から、刺青だらげの半身が顯れて見えた。

『おやッ』とお駒は驚いた、滑つく岩稜を渡つて、湯の邊近くに進んでから『モシ、ちよいとお湯治かね』と聲を懸けると、『へゑッ』と此方を回顧いた男は五分月代の、右の眼が瞎、色の鈍黑い、鼻の扁たい顏。

『阿誰でしたつけかな』。不思議さうに隻眼を光らす。『ゑ、妾アね、つひ此頃この島に來た旅の者なんだが、お前さんは……此土地の者ぢやアないらしく見えますね、言葉の樣子が、什麼も關東らしいが、どちらですね、お生れは？』、お駒は訊いた。

『へゑ、私ア、品川でげす、此の島へ來てから三年になりますんでさア』。『爾う、道理……』とお駒は頷いて、品川から什麼して又たこんな海の涯へ？難船でもなすつたのかね』。

（六十四）

『いゑ、難船なんぞぢやアありませんやな』と瞎男は湯から上つて、さも心地好さゝうにぬ

るい欠伸をしながら岩角に腰を懸けた、『品川の近所で碑文谷の親分といへや、聞ねた俠客だが私ア其の一家で片目の幸藏といふんでさア、何ね、お前さん、這麼島に來るんぢやア無かつたが、つひ引くに引かれねね羽目になつて、一思ひに殺らしちまつたんでげす……エ、賭場の喧嘩でさア……それで永いこと傳馬町の牢獄に置かれたが、明治の代になつてお蔭で、まア甚麼か恁か首だけは繋ぐことが能きて、島送りてねことになつたんでげすが、早いもんで最も三年になりやすせ』。

『それぢやア、兇狀持なんだね、道理で柄が異つてると思つた』とお駒は好い話相手を獲たのを悅んだが、其下から種々の疑問が泛んで來た。

『島流しにされた身で、よく那麼に遊んでゐられるね』。先づ第一の不審。『ね、ね、遊んでゐるてね譯ではないが、私ア身に腫物がして勞作が出來ねねもんだから、御役人衆に願つて休ませて貰つて、毎日此の湯に通つてゐるんで』。『氣樂なもんだね、本土なら那麼眞似も出來やしないよ』。『エヘヘ、其處が島の有難さでさア』。

『一体此の島には流人といふのが、今何人ばかり居るね』。次の問をかけると片目の幸は考へて『左樣さ、今の所ぢア、グッと減つちめねやした、何でも私が來た時には、三四十人も居やしたが、去年の五月にね、德川さまが瓦解になつて、明治の御代になつた御祝だてねので、大抵恩赦になつて歸つちめねやしたが、其時に取殘されたのは私們のやうな惡黨者で、改心の見込が無ねと正札の附いた奴ばかり、都合三人だけ其の御沙汰に洩れやしたんで、それからボツリ〳〵と江戸から送り込まれたのが、エート、七八人も有りやすかね』と答へる。

『そればかりかね、私ア又た鳥も通はぬ八丈島へなんて、追分節に唄うくらゐだから、最つと大勢居ると思つたがと、お駒は意外に感じた。

『昔から此の島へ流されたッてね人で名高ねのが、ソレ爲朝さまよ、お詣りになつたらうが、その祠が城山に在りまさア、それから太閤さまの時分に何とかして流されたといふ浮田秀家父子の墓、お附の官女五人も此島の土になつたさうで、同じ稻葉の塚に埋つてゐやす、それから越後の松平騷動で流された林内藏助や荻田主馬なんてねのもありやすぜ、私も此處で死了れりやア、片目大明神と祭られて、遠睨みの利く護符でも授けようと思つてるんで、さア、ハッハッハ』。得意に歷史を語りながら、湯から上つて、黥だらけの體を拭いてゐる。

『そして一体、流人といふのは何處に居て、甚麼勞作をさせられるんだい』お駒は岩の根に腰をかけて、女持の莨入から小さな煙管を拔いて、かち〳〵と火を燈る。

『先づ何でげす、此處へ來ると流人證文といふ送り狀に引合せて、一旦御陣屋で引取つて、それから村割になるんだで』。『ね、村割といふと？』。『村方の役人が陣屋へ來て、籤を引くんで當つた者は割られた流人を引取つて、自分の村へ連れて行つて、百姓とか漁師の家へ預けるんだが、仕事はてねと、薪取、船場下し、葛や芋を掘つたり、海草を拾つたり、田や畑をいぢくらせられる事もありやす、辛いのはその食物で、自分の口は自分で糊すッてね定なもんですから、まア漁のあつた時には、魚を貰うてねことも出來るが、平生は魚腸を塩辛にしてお菜にしたり、草木の實を採つて空腹いのを凌ぐつてねな有樣で、病氣にでもなつた日にやア、そりやアー惨めなもんでげす、藥一服飲めるぢやなし、莚の上の偃れ死、犬のやうに死骸は取捨て是ぢやア成佛が出來る譯のもんぢやア無ねや』。

悲慘な流人生活の内情を說いてから更に事實を添へて『これでお前さん、辛くつて堪らねから島拔を企む奴も偶には出來るんだが、發見らうもんなら大變だ、直と叩き斬られて野晒しさ、でなくつても、海端に行つて忙然突立つて矚めたり、船へ手でも掛けてゐる所を、役人にチラと睨まれたが最後、島拔の下心があるに違ねねと高飛車に出やアがつて、容釋もなく手械足枷、死ぬ程打たれるんだから怖いもんさ、最う〳〵來るとこぢや無ね』と湯冷のやうに身

顫ひする。

お梅が居なくつて倖僥、這麼事を彼の耳に入れやうものなら一層の恨と嘆きを加へる種であると、お駒は思つたが、ふいと胸に泛んで『あ、爾う〳〵、お前さんに聞いたら解るだらう、アノつひ此の春、這麼に流された人で、東京府の役人であつた片桐義卿といふのを、お前さん御存知かね』と訊ねた。

『ね、片桐？』と幸は松の枝に引かけた衣裳を着終つて、三尺帶を締めてゐたが、急に口を開いて『ア、！先生だらう、知つてる所の沙汰ぢやねね、片桐先生なら今日も遇つて來た』。

『ねゝッ！遇つた!?』。お駒は後背から唐突に鞭打たれたかのやう、吃驚して飛揚つて『ほ、ほ、眞箇かね？』と叫んだ。

（六十五）

お駒の驚き樣が餘りに仰山であつたので幸藏はそれを怪しむものゝ如く隻眼を光らして、顏を凝視めた儘、口を緘んで了つた。

『嘘だらう、お駒は己れの仇ないのに氣注いて、再び岩稜に腰を下して、强ひて沈着を見せて欺いでやつて、弄ばうなんて、お前さんも人が惡いよ、倘し片桐さんに遇つたてゐのが眞實なら、それは幽靈だらうさ』と笑つた。

『戯談言ひなさんな、幾個日本の涯の島だつて、未だ足の生ゐた幽靈にはお目に懸つたことが無ゐ』と幸はそれを駁して『一体、お前さんは何處から來なすつたね、そして片桐先生たア什麼いふ緣故のある方ですね』と今度は反對の質問。

『妾かい、妾は矢張江戸で生れた者さ、片桐さんてね人は知らないが、その妻女さんと心懇いんでね、今度一緒に此の島へ渡つて來たんだが、折格遇はうと思つた其の人が、疾に死んぢまつたといふので、落膽しちまつたのさ』。『ゐ、死んぢまつた？先生がかゐ、へエー』。『ソレ、御覽、嘘の皮が剝げたぢやないか』。『何が嘘で』。『駄目だよ、欺がうとしたつて……旅の者を爾う窘めるもんぢやアないよ』。『へエー、誰が、そんな事を言ひやがつたか、氣の知れねゐ奴だな』。

斯くても猶お駒は信ずる氣になれなかつた、一時の糠喜びに吃驚させられたのが、口惜しいやうな心地もする。

『ぢやア、お前さん方は、先生に遇ひに來なすつたんですね』。『爾うさ』。『遇ひやしたかい？』だからさ、解らない人だねゐ、死んだ者に遇はれる理窟はないぢやないか』。『ソレ、それが訝しい、變だなア』。幸は小首を傾げてゐる『何が變なの、お前、勘違ひをしてやしないかゐ』。『什麼？』。『人違ひぢやアないかゐ』。『だッて片桐さんでせう』、『爾うさ』。『片桐てゐ名のついた流人は、此の島に二人居る筈は無ゐから、間違ゐたくとも無ゐやうが無ゐんで』。『それぢやア、ど、ど何處に居る!?、そ、そ、その片桐さんは一体、ど、何處に活きてゐるんだい！』。お駒の瞳は燃ゐた。促込んだ調子で口早に訊ねながら、突と立揚つて側へ寄る。

『あ、それぢやア何だな』と幸は空を睨むやうに『お前さん們を遇はせまいとする差合の仇敵があつて、そんな嘘ッ八を言つて聞かしたのに違ゐねゐ、む、爾だ〳〵』と首を掉つて『片桐先生から、此處から十四五町、末吉ッてゐ所に居なさるが、今ぢやア小ぽけな神祠に這入つて漁夫や百姓の小兒に手習十露盤、寺小屋同樣の事をしてゐなさるが、土地の者は皆な有難がつて先生々々と敬ひ奉つてゐやす、氣の毒なことには一月前から病ゐついて、足腰も立たねゐやうになつてゐるが、それでも猶且元氣でゐなさるのを、途方も無ゐ、死んだとは何のこッた、莫迦々々しくつて噺にならねゐや』と語る。

お駒は餘りのことに言葉が出なかつた。眼を視据ゑて、息を呑んで、煙管を宙に持つた儘、身動きもせず、凝然と考ゑ込んだ。夢！今の我は全然夢幻の境に立つてゐる。

此の目お梅は假の寓に居殘つて、何を爲るでもなく、那を思ふでもなく、宛ら霜に碎けた翠をかいつくろふ力もなく、薄れた秋の日影に、殘る命を嬲らるゝ片つがひの蝶のそれ、昏々と柱に凭れて、消ゑた昔のまぼろしを趁ふのであつた。

『御新造、居なさるかな、ハイ、山本博庵でござる』。梛子の葉を編んだ栞戸の方で、咳ばらひがした。

此の聲にはつと我に復つて、庭先を振向いて看ると、例のドクトル先生が扇子を額に翳して日避の廂にしながら片手に筈箒を提げて、ちよこ〳〵と這入つて來た。

『おや、能くこそ』と急に笑顔をつくつて、椽先に迎へた時、お梅の眼に他の人影が映つた。陣笠に生平の三尺羽織、裾短かに袴を穿いて、釣竿を肩にした男は、見覺ゑのある地役人の小名木であつた。

（六十六）

世話になる人、ならねばならぬ人、その博庵が此の島の王ともいふべき權力の代表者を伴つて來たのであるからお梅は假令可厭でも、御愛嬌を振蒔いてやらねば濟まぬところである。

『こんな汚窶しい所へ、能くまアお揃ひで入らつしやつて下さいましたねゑ』と嫣然して『さア、情願お上りくださいまし、御覽の通りお敷物も何にも有りやアしませんので、眞箇に不自由でございますの』と梭櫚團扇でばた〳〵と疊の塵を拂ひながら『先生、こちらの方が風入が可うございますよ、只今お煮花を……生憎今日は姐さんも宿の主人も皆な出て了つたもんですから……オホ、こんな風姿をして失禮でございますのね』と洗ひ髪のほつれを氣にして搔上げる。

『いや〳〵、最うお構ひくださるな、此處で結構々々、さア御支配さま、御懸けなさいませ』と博庵は着てゐた黑紗の道服を脱いで、手早くそれを疊んで、袖がはりに椽先に敷くと、小名木は横柄に其上へ腰を下した。

實はな、御新造、今日は近頃にない鰹日和、お役所の方も、閑だといふので、つひ此の先の濱邊へ釣のお伴、獲れた魚は即席料理にして、海の風色を眺めながら、飲んでは釣り、釣つては飲むといふ趣向なんだ、什麼だ、洒落れてるだらうが』。『おや、左様でらつしやいますか、お娯みでございますね』。『に、そこで早速のお賴みぢやが、貴公も一つお交際ひくださらんか』如何ぢや』、『に、妾でゞございますか』。お梅はその顏を視上げる。

『可からう、是非差繰つて貰ひたい、男の中に女一人も妙ぢやといふ懸念もあるだらうが、實はソレ、料理からお燗番、凡ての斡旋をする者が無いので困り居るぢや、なに、愚老が致しても宜しいのぢやがな、爾すると船頭の役に廻る者が無い、御家來衆も大勢居ることなり、此邊の漁夫を狩上げるなぞは、只一聲を懸けるだげの手數だが、今日はな、御支配といふ嚴ましい肩書抜きで、眞の平人、友們交際でお遊びなさらうと被仰るから、エ、結構、に、他人が這入ると面白くない、お梅の方と只た三人、彼には御臺所の賄方といふ役を振つて、愚老は昔取つた杵では無いが、一本の櫓で自由自在、唐朝鮮でも何處でも、行けと被仰る所へ舟を着けやす、と慢じたのが藪蛇で、とう〳〵船頭の役を申し附かつたのぢや、さ、斯くの通りの次第ぢやに依つて、迷惑でもあらうが義理ぢや、まア〳〵見物の心算で出て見るが宜しい、とんと氣

が變つて保養にもなるぜ、の、如何ぢや』と一人で喋舌立てる。

お梅は只と當惑、偖何と言つて斷つたものかと考へてゐる。と見た博庵は窃と手を伸して、小名木の腰をちよいちよいと突く。

『む、其許は確か先日役所に見ゐられた御婦人ぢやの』、今までお梅の顏へ變な眼づかひの、偸むやうな視線を投げる下から片頰でにや〳〵と笑つてゐた小名木は、博庵の合圖で始めてそれと解つた如くに粧つて、『いや、彼の際は誠に氣の毒なことをいたしてのけた、嘸無慈悲な、邪慳な役人と怨んで居ることぢやらうが、役目の表時としては、心にもない憎まれ口を申すこともあるぢや、併し内心では、ア、憫然なもの、貞節匹なき婦人ぢやと感服いたし居つたぞ、惡からず〳〵』と無闇と扇で煽ぐ。

甚麽いたしまして、却つて私們の方こそ、飛んだ無調法をいたしました、彼の樣な亂暴を…』とお梅が言ふのを博庵が遮つて『いや、彼の一件もな、本來ならば殘らず召捕にもなるべき所ぢやが、私から事情を申上げて、歎願に及んだ所が、ア、左樣か、許して遣せといふお言で、其儘に差措かるゝとは何と、御新造、御慈悲深い御支配さまではござらんか』と槌を打つ。

『永く當所に逗留とあらば何かと心添もいたさう、不自由を感ずる事は、遠慮なう博庵まで申

し入るゝが宜しい』。『ソ、ソーレ、此の通りぢやッ。實に如何も、お情のある、お心の注かれた殿様ぢや、側から鍛り立てゝ、とう〳〵殿様にまで昇進らせた。

斯うなるとお梅は辭退が出來なくなつた。それでは不馴の失禮勝を御承知ならば――と餘儀ない承諾、髪を束ねて身輕になつて、留守を太右衛門の女房に托して、二人に隨いて、濱邊に出た。

見ると船は既に準備されてある、此の島では脱島を豫防する爲に、五人以上の力でなければ動かすことの能きぬ船舶のみを使用する。けれども遊山船といふ小形なのもあつて、村名主が預つてゐる。曳出したのは、それで酒筒や行厨、昆爐に醬油なども調へてあつた。

果然、博庵は水心がある。巧みに櫓を繰つて漕ぎ出したが、遠乘をしては危險なので、濱傳ひに四五町先、猿辻りといふ懸崖を左右に、一碧の灣を成した淵の上に船を逗めた。

是から釣が始まるのである。艫の方でお梅は忙はしく料理の下拵へ。

（六十七）

八丈島で漁れる魚は、松魚が重で、鮫は最も多い、次に踞沙といふのもある。是等の脂肪は燈油の代用にしてゐる。それから鯛類、縞鰺、室鰺、烏賊、秋刀魚、何でも產する。松魚を釣るには牛の角で拵へた餌を投げる、それが頗る面白いといふこと。

小名木と博庵の釣竿には、大分獵物が引繫つた。併しその獲物が目的でない、彼們の釣るべく狙ふ魚は他にあるのだ。

お梅は極めて肅しやかに彼們に仕へた。成るべく不滿足を感じさせぬやうに、少しでも興を添へるやうに、と力めて船の隅々にまで心を配るのであつた。眼も曠々とした海の色風、絕にず釣られて上る銀鱗の數々、來て見れば成程珍らしく思はれて、涙に燻ぶり勝の今までの苦勞も忘れられる。

酌をと呼込まれて、胴の間に膝を突合せ、此頃は餘り嗜まぬ酒も御愛嬌に三猪口ばかり、顏が紅潮となつた頃から、そろ〳〵と小忌らしい言を聞かされた。

それも始めの中は、酒の機嫌と聞流して、程好く柳に受けてゐたが、漸々眞面目らしく突込んで來る樣子が、甚麽やら眞物の低氣壓――博庵の所謂デレスケーの颶風が襲來しさうなのでお梅は偖こそと警戒し始めた。

『の、梅、甚麽ぢや、此の相談に乘つて呉れんか、身們も此の島の支配いたす小名木新六、眞逆お手前に不自由を感じさせる樣なことは爲ん、宜しいとなれば今日にも直と役宅へ呼迎へて奥同樣の手當を致して遣はす、彼樣な薄汚ない漁夫小屋に、汐風に吹き曝されて居るよりは、遙かに勝じぢやらうが、どんなものぢや』。

『何を被仰るんでございますよ、私のやうな者を、そんな事に遊ばした日には、それこそ島中の笑ひ物でございます、御役人さまの御威光にも關はりますから、まア お止し遊ばした方が爲でございませう』。

取られた手を振放してお梅は儼然となつた。その側から博庵は頻りと嗾しかける。

『コレサ、御新造、如何してそんな御挨拶を申し上げるのぢや、氣色がないにも程がある、不見不知のお前さんぢやが、良人を慕つて此島へ流浪して來た境遇が、誠に可哀想ぢやと思し召せばこそ、爾ういふ有難い御意が下つたのぢやないか、そのお慈悲を足蹴にするといふのは、失禮千萬、不心得至極といふものぢや、御部屋とはいふ條、お側に居れば奥さまも同樣、お前に取つてゐらい出世、ソレ明日からは島の者が、ヘイ〳〵奥さま〳〵と崇め奉るのが、解らないか、是が眞箇の玉の輿ぢやのに、乘損つて後悔するのは、氣の利かぬ頂邊だぜ、さア〳〵お

請をしたり、お請をしたり』。

『可厭だよ、先生、執ッ濃いねね、私アお役人のお妾にならうと思つて、こんな八丈島くんだりまで、まごついて來やアしないよ、死んだ亭主の墓詣りに、毎日泣いて〳〵、泣死をして、一緒に土になつちめゐば、それで私の願が叶うんさ、外に何にも望みが有りやアしないの、それを人の慰み物になれといふ氣が知れない、此の お梅はそんな柄ぢやアないのよ』。

餘りに腹が立つので、つい地金が出た、平生の愼が破れて、痰火を切りたくなつた。小名木を背後にッンと拗ねて、凄い目に博庵を睨めつけると、二人はその見脈に呆たかのやう、顏を見合せてゐる。

此女、存外の漠連者ぢや』。小名木は忽ち嚇となつて『おのれ、よくも此の小名木に耻を搔かつたな、コレ、博庵、破れ黴れぢや、ふん縛れッ』、突と身を起しさま、お梅の衿首へぐつと猿臂を懸けた。

『む！、仕方がない、荒癈治かな』。『おや、おまはん們は私を手籠にする氣かね、ヘン、騷々しい、釣られた島海老のやうに、いやにピン〳〵跳ねなさんな、同じ魚でも婆婆といふ荒海を股にかけて來た私だもの、そんな鈎に引懸けられて堪るものかね、是でも鰭に針があるから、

拙なことをして蹴られないやうにおし。』

『何をッ、小癪なッ、小名木が後背より抱窘めやうとする、其の手を振解いて、帶の間に隱してあつた護身の懷劍、きらりと眼先に光ると俱に、博庵は悸然として尻餅を突いた、舟はゆら〳〵と左右に盪く。

お梅は死物狂ひ、滅多突に白刄を振る。それを小名木が打落してし纖腕を捻ぢ上げるより早く、刀の下緒でぐいと後手に縛り上げた、博庵は側から手傳つて、猿轡までも食まして了つた。

萬事休す、お梅は絶体絶命である！

とは夢にも知らぬお駒、瞎の幸から意外の事を聽取つて、一時は思ひ惑つたが、兎にあれお梅にそれと知らせて同道の上片桐の所在地を訪ふべく決した。で幸を連れて急ぎ寓に戻つて見ると、お梅は居ない、留守居の女房に訊ねて、始めて島役人と一緒に釣舟に乘込んだことが解つた。

釣とあるからには遠くはあるまい、陸上からなりと合圖をして呼戻さうと直に跡を追蒐けて猿辻りの懸崖に上つた。

瞰下すと、今しも此の椿事、危機は眼前、あれ！あれ！足摺して氣を揉み躁る。爾もそれを救ふべき方法だにない。

（六十八）

『あッ、こりや何たる事ぢや、こんな幼さな小兒を……實に呆れはてた奴だ……む、可し〳〵泣くな〳〵今解いて遣るぞ』。

悲痛しい花子の啼聲を附聞けて、それを措置くに忍びぬ所から、戸を揑開けて平右衛門の住居に這入つた男は、忙しく靴を脱いで、躍るやうに破れ疊に上つた。

年紀が四十ぐらゐの、散切天窓の鼻下の薄鬚、面長で眼附の優しい、駒形の美濃平仕立と見ゐる黑絹のマンテルに白の胴衣と窄袴、腰にぐる〳〵と白縮の兵兒帶を捲いて、細身の刀を落し差にした、其頃の紳士らしい風采であつた。

花子は褌一つの裸の儘、少さな手を後に縛られて、柱に括しつけられながら、皺枯れた聲で泣叫んでゐた。それを手早く解いてやつて、壁に懸けてある衣裳を着せながら。

『おゝ、道理ぢや々々、泣くのは無理がない、こ、こんなに手の色が變つてゐるくらゐぢやから、定めし痛かつたであらう、最う可し〳〵、泣くことはない、泣かずに、ソレ、顏を拭け、アハハ、大分涙で汚なくなつて居るの』。

と賺し立てる眼の下に、不潔な食器を餅櫃の上に乗せてあるのを認めた。

『お前、御飯を食べたかい？』。『いね、食させないの、昨日から食させて呉れないの』。『ねッ絶食かッ！、いよ〳〵以て怪しからん、それでは故意と御膳を眼先に突つけて置いて、嬲り物にしたのか、いや實に言語同斷、地獄の責苦ぢやの』。

『恐ろしい人鬼もあるものと驚いて、偖その食料はと檢めて見ると、生味噌をぼつちり、飯櫃の中にはぽろ〳〵した強飯のやうなのが只一塊。

例もこんなお菜か？』。『爾な？、食べると打つの』。『むゝ、道理で今見たところでは、渾身に痣の痕が……一体甚麽してこんなに窄められるのぢや』、『わ、私、な、何にもしないの』。

『ホウ、何にも爲ないで打たれる？可し、解つた、是から叔父さんが家に連れて行つて、美味しい物を澤山食べさせるからの、最う心配することはない、ハテ、何處へ出居つたか知ら……憎い奴ぢやの』。

憤慨、嘆息、荐りと花子を劬はつて居る所へ、戸外にせゝこましい下駄の音がして、お秀婆さんがとつぱくさと戻つて來た、門口にその影が映すと稍と啼き歇んでゐた花子は、蹶ねたやうにわッと聲を揚げた。

『あれい！、ど、ど、泥坊！』と婆さんは突然怒鳴立てゝ『お隣の内儀さん、源さん、長さんきいちやんやア皆な出てください、泥坊が這入つたよ！』と近所を喚ぶ。

洋服男は冷かに一瞥して笑つてゐる。

『ねッ、こ、此の横着野郎、晝日中人の家へ這入りやアがつて、飯をかつ喰つてやがるとは、呆れ返る程圖迂々々しい泥坊だ、おや、手前、此の小兒を攫つて行く了簡だな、何處まで押が太いか涯が知れない、過日草履が失くなつたのも、盥を盜みやアがつたのも、手前の仕業だらう、さアふン捉まへて町會所へ引張つてくから爾う思やがれッ』。

門に顫がつた心張棒を押取つて、勝手に駈上るより早く、いきなり打つて蒐る、その下を潜つて『ねゝッ！』。婆さんは撲然と前に偃つた。利腕を捻上げられたなりに。

『此奴、賊とは何ぢや、其方こそ賊よりもズンと太い惡婆であるぞ、我輩を誰ぢやと思ふ、民部省出仕權大錄の稻垣勝之進の顏を、よく覺ねて置け。

背に乘蒐つて、ぐい〳〵と壓つける。その下に婆さんは『うむ、うむ』と眼を黑白。

（六十九）

稻垣勝之進は熊本細川の分家に當る肥後高瀨藩三萬五千石細川若狹守の家臣で、維新後新政府に登庸され、民部省の官吏となつたのである。恰かも其の藩部は船松町二丁目に在るので、此邊の民情に能く通じてゐたが、同年外國居留地を取擴げ、海岸通だけを餘して船松町全部を編入する事になつたので、藩邸も取拂つて了つた。で其の跡片附の指揮を藩から囑まれ、毎日役所の戻りに見廻ることにしてゐた。來ると例でも平右衛門の前を通る、通る度ごとに小兒を窘りちらして泣かせてゐる、けれども別に心に止めなかつたが、今日は一際慘ましく聞かれた忍びかねて近所の者に不審を糺すと、名題の鬼婆であることが解つた。それは捨置かれぬ怪事だと直ちに飛込んで、慈善的の空巢狙ひを働いたのであつた。

お秀婆を足下に敷いて、さん〳〵膏を取つて居る所へ、折好く平右衛門が花客廻りを了へて歸つて來た。今までは知らぬ顏で澄ましてゐた近隣の者は、それと見るや、申し合せたやうに、

好い加減な用向を拵へて、樣子を見屆けに寄つて來る。稻垣は一同を前にずらりと列べて置いて平右衛門夫婦に說諭を始めた。

平右衛門、お前は身們の顏に見覺ねがあるだらう、此の裏に藩の屋敷があつた時分に、お前の案內で御臺場邊へ釣に出向いた事も二三度ある筈ぢやが』。『へイ、御承知申し上げて居りまし、大層お心附のよい、何かに行渡つたお旦那さまで……へイ、彼の節は又た多分な御祝儀を……』。『三年前の禮なんぞ申さんでもよい』。『へイ、左樣でございますかな』。『平右衛門、こりや一体甚麼したといふ始末ぢや、未だ幼少な頑是のない小兒ぢや、それを一晝夜も絕食さした上裸にして、縛りつけ、內を空に出歩くとは、實に呆れはてた鬼ぢや』。

『ねッ、ちよつと旦那、お待ちくださいい』。爺さんは怪訝さうな顏で『そりやア何處のお噺でございやすね』。『ソレ、それだから不可ん、お前は家の中の出來事も知らずに居るのか』。『へイ、存じて居りやす、痛いと申しやすから、手荒いことをしても甚麼かと思ひやして』。『うむ』『一体なら殼の荆か何かで破つちまつて、膿を絞ると好いんですが、赤膏藥を貼つて氣長にちらして了ひやした』。『訝しいの、何ぢや、それは』。『此の兒の腫物でせう』。『謔氣奴』。『此の婆さんは、お前の女房か』。『へイ、左樣で、忘れもしない十八の齡でした、ふとした機

會からソノ、妙な譯になりやしてな、平さんや、お前さん私を見棄てると、身を投げるよ、死んで憑着くよ、化けて出るよと申すもんですから……』。『コレ〳〵何を言ふ、そんな五十年も前の惚氣を聞くのではない、お前は此の婆さんを何の爲に家に殘して置のぢや』。『ヘイ、泥坊避にな、猫には勝しだらうと……いね、何、爾いふ譯ではござりやせん、一緒に連れて歩ても宜しいのでがすが、年が年中お彼岸ばかりはなし、引切なしの阿彌陀詣りは、根が續きかねますんで、ヘイ』。『ハ、、、、お前は如何も餘程耄碌してるやうだ、留守中、此の婆さんが預り子を慘たらしく折檻するので、近所の評判、町内の取沙汰、いづれも鬼婆ぢやと爪彈きして居るのが解らんか』。『ヘエー、此の婆さんが……そんな事がござりますかな、ハテ子』。『今になつて驚く腑拔者があるか、見い、此の通りぢや』。

花子の肌を脫がせて痣を見せると、平右衛門は吃驚して眼を睜つてゐる。

『こりや、容易ならん科ぢや、氣の毒ではあるが是より町役人へ其の旨申し知らせて、東京府へお前們二人を引渡すから、左樣心得い』。『ねッ、私們をお召捕に……と、と、飛んだことです、だ、だ、旦那さま、お慈悲に情願御勘辨を……コレ婆さん、早くお佗をしなよ、何を虛呂〳〵してるんだ、逃げたつて行所もないぢやないか、モシ、御近所の衆、お前さん方もお情だ

旦那にお縋り申してください』。

平右衛門は眞蒼になつて顫ひ上つた近隣の者は好い氣味だと心で祝してゐる。

（七十）

『平さん、そりやアお前さん、身から出た錆だよ、海一つ離れた房州にさへ此の兒の泣聲が聞ねるといふくらゐだのに、一つ家に居ながら毎日々々婆さんに窘りちらされるのが解らないといふ事がありますか、お前さんは一体頓痴氣だよ、薄惚だよ、だから婆さんに愚弄にされ切つてゐるのだ』。『爾だとも爾だとも、律氣も事に依りけり、知らない中なら佛になつてゐました で濟みも爲ようが、恁う解つて見れば默つてもゐられまいぢやないか、平さん、何故大衆の見て居る前で、此の婆アを打つなり蹴るなり懲らしつけて遣らないのだ、此の婆アは何のくらい近所の憎惡が懸つてゐるか知れないぜ、一つ家だの鍋島の化猫だの、三途の川の追剝婆だのと蔭口を所かれてるのが、お前の耳に這入らねねのか、さア詫をして呉れろといふなら爲ても上げようから、思ふさま打ちなせね、私們も手傳つて遣らうよ、オイ、浪さん、大槌か玄能を持

つて來な、此の惡たれ婆を打偃すんだから……お隣の内儀さん、お前は急いで釜に湯を沸かせェ、サ、天窓から打沃けて遣るんだよ』。

平生の鬱憤を霽らすのは此時だと思つて、近所合壁の連中は頻りとお秀を攻擊する、肝心の證人は悉く被告に不利益の陳述を爲る始末に、流石の婆さんも立瀨がなく、隅の方に窘み返つて念佛を唱へてゐる。

『まア可い』と稻垣は笑つて、前非を後悔して、向後氣を注けると申すことなら、公沙汰にすることだけは見合せて遣る、併し平右衛門、此儘打棄置いたなら、喉元過ぐれば喉、又々惡い癖が再發に及んで、遂に、此の兒を責殺すやうなことになるかも知れん、就ては其許への相談ぢやが……』と膝を進めて、聞けば此兒は、何處からか拾ひ取つて參つた者ぢやが、それに相違ないか、町會所への屆出、又た心當りの探索、其の邊の手運びは洩れなく致したであらうな』と聞く。

『ヘイ、そ、それは、及ばずながら手の屆きますだけは、探しても見ましたが、如何したものかさつぱり身許が知れませんので、ヘイ』と平爺いは恐縮の中から、風雨の那裡に濠から救ひ上げた事實を噺して、御勘辨くださいやすなら、最う甚麽事でも旦那さまの宜しいやうに仕りやすで、ヘイ』と手を突く。

『それでは一向に素姓も氏も知れんのぢやの』と稻垣は頷いて『甚麽ぢや平右衛門、此の兒を身們が讓り受けようぢやアないか』。『ヒ、旦那さまが？』。『左樣、貰ひ受けて手許に養育して見ようと思ふ、異存があるかな』。『いヒ、甚麽いたしまして、實は手前も何としたものかと思ひやして、持餘してゐた所でございますが、旦那さまが御引受くださりやア、最う願つたり叶つたり此上もない仕合で……だが婆さんは』。『いや、婆に相談は要らん、御近所の衆、御銘々の意思は？』と尋ねると、無論異議のあるべき理がない。『結構でございますとも、抛ときやア窘り殺されるのを、貴官が救けてお呉んなされば此兒も幸福、手前們まで大安心ございます』と口を揃へる。

然らば今日あらためて、此の稻垣勝之進が引取りますぞ、後日の爲ぢや、平右衛門一札認めて呉れ、さア、是が今までの養育料ぢや、此の兒の親に代つて遣して置く』。

這の一語こそ、花子の運命に、新たなる曲線を描かしむる出發の信號であつた。

稻垣は手當として金五兩、外に隣保の者へ祝ひ酒として一兩を贈り、花子は自分が拾ひ取つたものに相違なきこと、今後一切關係のないといふ證文を平右衛門から取つて、五人組に連署

させ、芽出たく花子を受取つて自宅に連戻つた。

當時の住居は、芝山内の背後に當る飯倉三丁目、俗に土器町といふ地點、馬塲といふ旗本の舊宅で、庭續きが金地院や瑠璃光寺の刹地であつた、此の寺院に密接してゐたのが後日花子の教化に大なる影響を與へたのを、稲垣は心注かずに居た。

妻はお照といふ同藩士の永見某の次女、嫁いでから八年になるが、田の熟り薄くして、二人まで子を産んだけれども皆早世した。淋しい家庭の、春知らぬ籬に想ひがけぬ、大輪の玉なす葩が咲いたのであるからお照の歡びは尋常ではなかつた、幾んど神のお授けと思ふばかり、あらゆる愛を傾けてはぐくみ立てた。

花子の徑路はいかに變化するであらう？

（七十一）

手も足も出ぬとは、今のお梅が境遇である。聲を立てゝ救を呼ぶにも手拭の轡、跪いて脱兎けようとしても緊しい縲紲、駈出して逃げたところで、舷三寸の外は底知らぬ龍の棲窟、溺れて淵の藻屑となるばかり、活きようとすれば終生の汚辱を受ける、受けまいとすれば死ぬより外はない

死！只それだけである。死して操を全ふするのが、此の塲合に於て取るべき誰一の方法である。良人が存生へてゐるとでもいふのなら、猶且惜まれもすれ、凡ての望を墓の下に瘞め去た今の身では、有る甲斐もない這の命――その玉の緒を節操の刄に斷つとも、やはか良人が犬死と吃りはせまい、と刹那の間に意を決した。

いきなり飛起きて、蚤る小名木へドンと突當ると、機會を喰つて後方へ蹌ける、その隙に舷へ片足を踏みかけてあはや淵へ！

懸崖の上ではお駒が狂人のやうに噪いでゐる。

『おい、幸さん、幸さん、大變だよ、チヨ、チヨ、ちよいと御覽、あッ、あッ、あれッ、ど、ど、甚麼せうね、お前、な、何とか工夫が……た、た、助けて遣る工夫がないかね、おい、幸さん、甚麼したら可いだらう』。

巖角に捉まつて、頸を伸して、例の隻眼を光らせて船中の模樣を俯瞰してゐた幸藏は、後方を回顧つて

『む、彼箇がお梅さんでげすね、ウフフ畜生奴、味なことをやつてやがる、ソレ、最う一人の野郎、彼の博庵てねのが、お前さんに話した通り、酢でも蒟蒻でも喰ねた貨物ぢやア無ねんで始終こんな事をしちア、役人に胡麻ばかし摺てやがる藪枯しでげす、彼奴の爲にどのくれね、我們が泣かされたか知れやせんせ』と存外に冷かな態度。

『ま、そんな話は甚麽でも可いよ、何とかしておくれなねね、幸さん』。お駒は岩の上に地團太を踏んで、恁と知つたら宿から鐵砲でも持つて來るんだッけもの……生憎又た一疋も乾兒を連れて來なかつたのが、わ、私の手脱りだ、あッ、ざ、ざ、殘念たねね』。拐り取つた臺の葉を拳で引裂いて、身顫ひの切齒。

『オット、危ねね、餘り此方へ寄んなさんな、キャッ〳〵言つて下に聞ねると逃げられつちめねやす』、幸はそれを制して『可しッ、姐さん、私に任しときなせね』と頷いた。

『甚麽するんだね？』。『まア見といで！』、沈着きはらつて、幸は手に唾を吐つかけながら、つるりと片肌を脱いだ。

五六間後へ下ると、松の根を殘して頽れ落ちた赭土の中に、手頃の磊磈が幾個となく轉がつてある。幸はその一つを抱上げて、呟々息を喘ませながら崖際に持つて來た。重量は確かに八

九貫。

『おやッ、好い物があつたねね』。

お駒が狂喜の聲を後に、幸はその石を頭上に高く差扛げた。めり〳〵と腕に青筋が立つ、背上の刺繍は活きて動くかのやう。

『ねッ！』、鋭い矢聲もろとも、船を目蒐けて投下した石は、渦卷く風に颼と唸を揚げて空降る星の、エーロライト。

それが今しも浪に躍り込むべく身を礮へしたお梅の帶を引摑み、ぐるぐると解けかゝるのを手繰止めて、胴の間へ曳戻さうとする博庵の胸へ動と中つた。

『あッ！、博庵は苦鳴の下に仰反つて、手足をばた〳〵と藻掻く。

（七十二）

懸崖の上の鑒藏は、雀躍して手を拍つた

『占めたぞッ、ドレ最う一箇！』

續いて第二の石を抱上げた。『奴ッ、今度は彼のデレスケ野郎の番だぞ、エンヤラヤッ』。

渾身の力を絞つて、眼よりも高く差扛げる。その手にお駒は慌てゝ取縋つた、『ア、モシ、危ないからお止しよ、倘然としてお梅さんに中りでもしようもんなら、救けようと思つて殺すやうなもんだかさ』。

『戯談いつちやア不可ねね』。幸は言下に冷笑つて、眼玉は一つしか持合せが無ねけれど、上から石を投ることに懸けちやア八丁礫の喜平治、此島へ來て三年も稽古を積んでゐらアな、仕損じて堪るもんか、まア見物して居なせね』。

言ふより早く、覘ひをつけて斗然！墜した石は荒鷲の兎を搏つが如く、一團の黑光を曳いて、轟と唸りながら、飛び下る。

船の中では小名木もお梅も第一擊の石に駭いて、懸崖の上を仰看げると、疎らに生へた矮松の間に蠢く人影、その脚下から頽れるのか、赭土まじりの砂がずる〳〵と岩を辷つて落ちて來る。小名木は愕然として起揚つた、博庵を介抱する暇もなく、急いで櫓を把つて一生懸命の面楫に、舟をくるりと廻轉した。

途端に打落した第二の石、危く小名木の背を掠つて、仰反つた博庵とお梅の間にどしん！横

木は滅離々々と折れて、板子の上に凄じい響、その餘勢で船は鯨に蹴られたかのやう、舳が高く刎上つた、櫓を持つた小名木は動と尻を撞く、お梅は既のことに振落されようとしたのを、舷に支へられて止まつた。機會に潑と立つ潮沫を天窓からかぶつた。

『あッ、行損つた、殘念だなア』。

二人は叫んだが、見る〳〵裡に舟は崖の根を離れた。必死と櫓を切る小名木の影が、一町許の距離に見ゐる。

『姐さん〳〵、とう〳〵逃げられつちまつた』と幸はその舟を指さして、運の好い野郎だが、此の荒海で、爾も一人ッ切だから、何處へも行きやうが有りやアしねね、屹と舊の濱邊へ取つて返すに違ねねから、船の着かねね前に此方が先廻りをして、隱れて待つて居やせう、さア早く出掛けませうぜ』と促立てる。

お駒は心配さうに。だが幸さん、お前。後の迷惑になりやアしないかね？』。『案じなさんな什麼せ、此の島で果てる身、遲かれ早かれ土になるんなら、平生憎いと思つた野郎們を片ッ端から殺ッつけてよ、島の話に殘るやうなどゝらい事を仕出來して、それから莞爾笑つて成佛してねのだ、なアにお前さんに飛ッ沫は懸けねね、私一人で人殺しの科を背負つて立つからお前

さんは私に構はず、船が着いたと見たら、直と飛んで行つて、お梅さんを救けてお遣なせね、多寡の知れた木葉役人、俺一人の手で祭り込んぢまうのに、手間隙は要らねねア』と大氣焰である。

お駒は頷いた。『可し、爾う度胸を据ゑて呉れりやア、妾だつて行樣がある、賴むよッ』。『合點だ！』。

二人は足早に駈出した、猿辷りの崖を下りて、楮林や山茶の中を五六町、前崎の船着場と稱する砂濱へ出たが、姿を見られまいと砂地に引揚げてある漁船の蔭に、身を忍ばして待つてゐた。

案の如く小名木は此の濱邊に引返して來た、汗だく〳〵の眼色を變へて、必死と櫓を搖かしながら、稍とのことに船を着けた。

淺瀨に乘上げて、櫓を放して、瞿々と四邊を回看してゐる。それとばかりに幸藏は躍り出した、双肌ぬいだ黥を繪のやうに見せて、兩手に振上げた大石や下から『やい！此の犬侍ッ、よくも奴ア此の島を荒しに來やアがつた、手前の代になつてから、無慈悲と邪慳な仕打ばかり爲やアがるんで、何のくれね、諸人が難儀をしてるか知れねね、さア人助けの爲に其の怨を霽

らして遣るから、覺悟しやがれッ！』と絶叫して、ざぶりと波に飛込んだ。

（七十三）

幸藏の影を見ると、小名木は喫驚した顏をして『や、汝はッ』と眼を光らしたが『む、石を落して博庵を殺したのも、汝の所爲だな、流人の分際として、イヤ實に不屆なッ、此處動くな此奴ッ』と喝する下から、刀を拔いて飜然と浪打際に飛下りた。

が是は虛勢であつた。根が臆病の案山子侍看板で嚇かしてゐるのが、此の人の主義、成るべく危きに近寄らぬのを平生の方針としてゐるので、死を決した幸藏が血走る眦を裂き、大石を振翳して狂へる豹の如くに肉薄する、その物凄い見脈を見ると俄かに心柱立たせて縮み上つた。

なに、此處で斬捨てる必要はない、這麼狂漢に關り合つて怪我をさせられた日には莫迦を見る、逃げたくとも四方は海の孤島、袋の鼠も同樣である、部下の手で狩立てさせ、ゆつくり取押へても遲くはあるまい——と思つたので刀を振りながら突然逃出した。

『待てッ、虱野郎！叩き潰して遣るから覺悟しろッ』。

犬侍は一段下落して半風子になつた、脊後を見た幸は彌々勢づいて、斯く連呼しつゝ追蒐ける、彎曲弓の如き干潟の日影を反射して、眩しい光をちらつかせる白砂の上へ、慌だしい足痕を印しながら、此の虱どんは一目散に駈けるのであつた。

此の隙にお駒は急いで船に寄つた。手早くお梅の猿轡と縲紲とを解いて、砂地へ扶け下したが、其の際博庵が胸部から面部にかけて重傷を負ひ、淦の間に僵れたなりに絶息してゐるのを認めた。

濱から少し離れた堤の、小松の生ゐた芝草の上へ連れて來て、片桐が病死したといふのは嘘で、實際は未だ此の島に存命してゐることから、幸藏の狙撃に危急を救つたことを嘶してゐる所へ幸は息を喘つて駈戻つて來た、『姐さん、とう〳〵逃がしつちめゐやした、何しろ此方は重荷に先方は身輕と來てるものだから、氣の急くやうに足が續きやアしねゐ、漁師村から林の中へ這入りやがつて、影が見ゐなくなつちめゐやしたから、長追も詰らねゐと思つて、殘念だが取て返しやした』、『それで可いよ』とお駒は犢つて、恁なれば先も此儘打棄つときやアしまいから、お互ひに今つからその覺悟を爲とかなけりやアなるまいが、何よりも片桐さんに遇うの

が先だ、幸さん、濟まないが助け序に、是から直と此の梅ちやんを連れて行つてお呉れな、妾は些と準備があるから一旦宿へ戻つて出直して行くよ』。

『へイ、可うがす、直と御案内しませう』、幸は氣輕に引承けたが、お梅は餘りに意外なので、只夢のやうな氣がした、直ちに信ずることが能きなんだ。それを二人が繰回して碎いて聞かせて、その手を犇と握りながら、何にも言はず熱い泪をほろほろと墮した。

お駒は必ず近い時に於て一騒動の起るべきことを豫期した、此の騒動を突破して、お梅の爲に最後の力を揮ひ、然して後ち徐ろに此の島を去るべく決心した。

で、幸藏にお梅を托して、目的地に向はせてから、自分は宿所の太右衛門方に引返して、乾兒一同に號令を傳へ各々引揚の準備をさせ、武器携帶の上、片桐の居るといふ末吉村へ出發させた。

自分は一人の乾兒と下田から渡つて來た船頭とを連れ、豫て船を引揚げて置いた八重根港へ出掛けて、直にも出帆の能きるやうに用意を濟まし、一時間許を經て末吉に向つた。

（七十四）

末吉と稱ふる部落は、島の東北に方る一角に在るので、東は廓いた海に向つてゐるが、他の三面は帷を下したやうな嶺つゞき、鳶色の禿やら、橄欖色の笹山やらが、或ひは低く一帶のパノラマを描いてゐる。その山の腰のあちこちに、疎らに人家が點在して、淋しい炊煙を揚げてゐるが、交通と云つても山越の綫のやうな道を辿るばかり、海の方は嶮しい崖で浪が荒いから舟を寄せることすら叶はぬ程の僻地だ。

お駒は船の準備をしてから、北に向つて三根といふ部落に這入つた、此處までは地勢も平夷であるが、是から先は爪先上り、登龍阪といふ岨道を傳はつて末吉に降るので、約二時間を要した。

片桐義郷の居る所は、海に近い小邸の上に建てられた伊勢大神宮の祠と聞いてゐたので、それを目的に進んで行くと、遠くでわアといふ鯨波の聲が聞ゐた、折々發砲の音も交る。

驚破こそと躍る胸、頻りに途を急ぐと、朴と海桐花の林を成した野原の中で、先方から駈けて來る乾兒の磯五郎といふ男にぴたりと出會つた。

『いやア、おッかア、大變遲いぢやアありませんか、今私が迎ひに行く所で』と額の汗を拭いて『おッかアの推了通り、來て見ると犬勢で番をして居やアがつて、何と云つても片桐さんの居なさる社へ通さねゐんでげす、双方言び合つた末が到頭腕づく、騷ぎが大きくなつちめゐやした、急いで來てお呉れなせゐ』。

息を喘らしての報告、沈着かぬ眼の亢奮した氣色、腕には手拭で繃帶をしてゐた。お駒は點頭いて、先方は何人ばかりだゐ』。『左樣、彼是十二三人で陣屋の折助野郎に、島の若ゐ衆が交つてゐやす』。『怪我は餘程出來たかゐ』。『いゝゐ、なに、此方は私に松ぐらゐなもので、先方は二三人も打仆れやした、それで息繼ぎに一旦引揚げて、今彼所の林の中に皆が待つて、ゐやす』。

『爾うか、愈々面白くなつて來たね、そしてアノお梅さんや幸藏は什麼したの』。『ゐ、ゐ、それがね、一足先に來た筈なんだが、何處に如何なつたものやら、皆無行方が知れねゐので、倘しや先方の手に取捉まつてるのぢやア無ゐかと心配してゐやす』。『居ない?! ハテナ』。

斯く語りながら足早に前進するのであつた。お駒は博庵と小名木の擧動から推測して、必ず

片桐の身道に不測の災あるか、少くとも自分們の接見を妨ぐる爲め、嚴重の警戒を加へつゝあることゝ想つた、爾なると之を破るには、可厭でも一衝突は免れぬ、或ひは血を流すやうな椿事も起るであらう、斯くても勢ひ止むを得ぬ、一行十餘人、首を駢べて斬死するとも、お梅の爲に盡されるだけ、盡して遣らねばならぬ否、お梅ばかりではない、片桐も是非救ひ出して、最う一度娑婆の空氣を吸はせなければ、是まで骨を折つた甲斐もない、と臍を据ゑてゐたので此の騷ぎを聞くと一段の勇氣が加はつて、女ながらも肉の鳴る感がした。

お駒の姿を見ると乾兒們は急に元氣づいて、再び社の方へ逆襲した。武器は長脇差、火繩銃只一揉に追び驀る勢ひ、阪を目蒐けてワアーと喚喊する。

敵は社の家根の露れて見ゐる邱の上に陣取つて、袖搦刺叉、脇差、漁具の鉤などを獲物に、阪を下つて防戰する。此方の火繩銃を打つて放すと、先方は石を投げ落す、島だけに暢氣な舊式戰鬪である。

折柄、背後より駈附けたのが、島役人の小名木新六、四五人の部下を新手にして、突然應援して來た、前後からの挾擊に、味方は此處苦戰に陷つて、流石のお駒も林の中へ逃込む所を、小名木はおのれとばかり、白刄を揮つて斬つて蒐る。

虱と罵られた弱武者も、女の前には狒の如く强くある。

（七十五）

是より先、名木は、博庵の建議を容れて、片桐の蟄居してゐる末吉の社廟へ、部下の小役人と下男とを派出させお駒們が遇ひに來たなら直ちに追拂うやうにと嚴命を下して置いた。と此日濱から逃戻つて陣屋の小廝やら村役人やらを狩集め、幸藏を逮捕すべく再び濱へ取つて返さうとする所へ、末吉から下男が駈附けて――過日女關先に暴れ込んだ破落戸が七八人、只今隊を組んで、押掛けて來て、片桐を此方へ渡せ拒まば腕づくで奪るぞ脅かしてゐる、急ぎ御出向きの上取押へくださるやうに――と急報して來た、さては幸藏の口から凡べての秘密を嗅ぎつけて、片桐を奪ひ取らうと大膽な計畫を立てたのか、濱で見かけたお駒の姿、幸藏を嗾しかけて博庵を殺させたのも正しく彼の所爲である、二人とも多分末吉へ向つたことであらう、ソレ袋に括つて一人も剩さず叩き潰せ、と小名木は躍起となつて新手を指揮し、山路を駈けて一目散に末吉へ下つたのであつた。

お駒は根が旅藝者、武藝といふ程の心得はないけれども、氣の勝つた女親分喧嘩の場所で危ない思をしたことも度々所謂刄物馴がしてゐるので、此の修羅場の眞中に空立つて、平氣でゐられた、死に就くこと猶茶漬の膳に向ふが如し。此の度胸こそ彼們社會の誇とする十字架である。

勢ひ込んで斬りつくる刄を潜つて、沙羅の木を楯に、暫く懷劍で受流してゐたが、素より小名木の敵ではない、機を匝つて激しく迫り擊つ太刀風の鋭さに、遂には逃端を失つて阪下の崖の根に追詰められた。喃嗟眞二つ。

乾分們は死物狂ひに闘つてゐる、此の光景を回眄つて見る者だにない。小名木は得たりと踏込んで、ゐッ！浴びせかけた矢聲の下に劍は白き電となつて、お駒の頭上に閃めいた。

是と同時にズドン！消魂しい銃音。飛來る彈は小名木の胸板へ。呀、白刄を翳した儘ひよろ〳〵と後へ五六歩、梭欄の幹へどーんと突當ると、それなり尻を撞いてウート唸く。

『野郎ッ、覺ゐてやがつたかッ』。叫聲を先に脱兎の如く駈附けたのが例の幸であつた。『醜体ア見ろい！』、手に提げた火繩銃の臺尻を揮上げて、小名木の肩先を強かに撲りつけると、朽木のやうに横さまに倒れた。

小名木は此島開闘以來の汚吏として質朴な島人から、憎まれてゐた。剏して流人等は仇敵のやうに怨んでゐたのである。天は此の苛察横暴、虎の如き惡吏を刑するに、汚れた刑人の手を以てせしめた。恁くして濁つた島の空氣は一發の銃聲に依つて淨れめらた。

阪上の防禦隊は、一時必死となつて奮闘したけれども、命を投出して猛烈に突擊する兇徒の勢ひに辟易し、吶と頽れ立つて社廟の方へ退却したが、肝腎の指揮官が戰死したことが解ると南無三とばかり、忽ち山林の中へ逃込んで影も止めずなつた。

幸藏はお梅と共に眞先がけて到着したのであるが、護衛が嚴重であるので側へ寄れず、阪下の椰子林の中へ隱れて、お駒の來るのを待つて、居ると爭闘が次第に烈しくなるので、自分も飛出して加勢をする、その矢先に小名木がお駒と斬合つて居るのを認め、持合せた筒先にかけて狙擊したのであつた。

お梅を呼んでお駒と引合せ、怪我人の手當を乾兒等に任せて、警戒しつゝ邱へ上つた、伊勢大神の社廟近くに進んで見ると、敵は武器や食器を棄てたなりに逃走した形跡があるばかり、寂然として人影がない。

三人の足音を聽つけて、祠の狐格子から顔を出した者がある。姿こそ變りに變りはてたれ、

疑もない片桐義卿

と見てお梅は『オヤ、あ、阿郎は、梅、梅でございますッ』と叫ぶ下から狂へる如く躍り揚つてたゝたッと楷段を一跨ぎ、その格子を開けにかゝつたが錠が下りてゐる。『あッ、地烈たいッー』と顫へる手に搖ぶり立てると、恐るべき念力、格子の扉は滅離々々と音して二つに裂げた。

裂ける途端に、扉と俱に祠の中へ顛がり込んだお梅、いきなり良人の膝に飛着いてわつと泣いた。

（七十六）

げつそりと殺けた頰肉の、顴骨高く鬢黒く伸び、浮脂だらけの月代に櫛の齒を入れた痕もなく、窪んだ瞼の底からぎらと〳〵瞳が輝いてゐる。手も僅かに皮を止めたかと想ふばかりに瘠せさらばゐて、垢くさい灰色の衣の衿から、肋の骨も數へられる程、それが呼吸をするたびにびく〳〵と波打つ、薄れた血の色の艶もなく蒼ばんだのを見ても、いかに營養が不十分である

かゝ推せられる。

嗚呼、是が維新の志士、東京府の高等官であつた片桐義卿か、とお駒は驚いてその姿を瞻つた、いかにも甚だしい憔れ樣である。黑羽二重に肉菱定紋の羽織、黃金造の大小を佩いて、綠酒紅燈、金を揮ふこと土の如く、美人の膝を枕に、天下の英雄を罵倒しつくした柳橋時代の面影も、凛々しい裡に清秀の氣をつゝんで、好い殿樣振と雛妓にまでも騷がれた、其の昔の品位も威嚴も、今は肉と俱に落ちはてゝ、只是れ汐風に吹枯らされて磯馴松のそれの如くである。

『お、梅！』と義卿は愕然として『こりや、意外ッ、ど、ど、甚麼して來たッ?!』とばかり眼から異光を躍らせて、先づお梅の姿を不思議さうに俯視した。

『お、お、お懷かしう……』とお梅はその膝に身を投げかけて、見得も耻もなく啜り泣いてゐたが、何か言はうとしても胸が充塞になつて聲が出ぬ。稍く是だけ言つて又た突俯して了ふ。

『こりや、見苦しいぞッ』と片桐はいきなりお梅を突退けて、人目もあらうに、何の醜体ぢやッ、た、た、嗜み居らうー』と睨めつけて儼然となつた。

突退けられて、お梅は身を斜に、撲地と板の間に手をついたが、其聲の下からハッと氣が注いて、慌てゝ起直つて容を正した。而して『はい』と涙の下から答へたが、依然顏を擡げ得ぬ

のである。

『何と思つて個様な島まで尋ねて參つた』、義郷は肱を張つて嚴格に『よもや情に曳かされて、浮々と迷つて來た譯ではあるまいッ、只今の片桐は昔の片桐ではない、朝廷に對して不忠な所爲を働いたとあつて、半年に亘る申開きも相立たず、此の島に配流となつた身上であれば、取も直さず此世から捨てられた科人ぢや、生きて居ると思ふな、死んだものと諦めて、花子の養育をのみ專一にいたして呉れと、ソレ、越中島で別れる際に、彼個程堅く申し聞けたのに、未練を殘して、こ、こ、這麽島まで迷つて參るとは、エッ、腑甲斐のない女ぢやイ、島の法度を破つたなら、お、お前ばかりか、は、は、花子にまで難儀が懸るといふことを、存じ居らんかッ』さて〳〵、お、お、愚かな奴ぢやッ』と聲を顫はして叱りつける。

『は、はい、そ、それは存じて居ります』、とお梅は涙を拭きながら『存じない譯ではございませんが、朝夕阿郎のことを……、お、思ひやつて見ますと、ど、どんなに御不自由をしてゐらつしやるだらう、嘸お困んなすつてお在になるに違ひない、も、若しも御病氣なんぞにおなんなすつたら、まア甚麽なさることだらうと、種々な心配が……そ、そこで私は、坐ても起つてもゐられない樣な氣がしまして……寧そのことに……』と潤み聲、その辯解も亂れる思の梭に

上らず、半は啼いてゐる。

『譫氣奴ッ』と義郷は言下に遮つて、不自由や困難は覺悟の上ぢや、そ、そのやうな弱いことで、正義の、ぎ、ぎ、犧牲になられるかッ、こ、こ、此の片桐は、ぶ、ぶ、武士ぢやぞッ』と疾呼したが、その窪んだ眼からは、白い雫が淋漓として墮ちるのであつた。

お駒はそれを看てゐるに忍びなくなつた、お梅はいかに塲馴た、花柳社會の育ちであつても命を懸けた戀人の前では舊の初心さんに復つてゐる。それに塲合が塲合であるから、亢奮る情緒のその半分さへ口を听き得ず、只涙に物を言はせてゐるのにとも察せずして不機嫌らしい顏の天窓粉麓に叱り飛す、さても野暮な、堅いのは武士の常かは知らないが、餘りに同情のない邪慳な人だと、他事ならず氣の毒にも怨めしくも感じて、突いの階段近くに進んだ。

『モシ、片桐の旦那、それはお酷うございますよ、餘りでせう、餘りなお言葉ですわ』。

突然に言ひ懸けたので、片桐はへるりと後方を向いた。

『其許は阿誰でござつたかの？』。

（七十七）

『はい、私は伊勢の松阪で、お駒といふ道樂者でございますが、實ア妙な御縁でね、尊君の奥さんと姉妹同樣の仲になつて、とう〳〵こんな日本の涯までもお交際さ、萬事お心懇く願ます』と階段の上にお駒は腰を下した。

『ホ、ウ、伊勢の松阪？大層御遠方ぢや、什麼して又た此の梅と……』と義卿は不審さうに眉を顰せた。『成程お解りになりますまい、こりやア私からザッとお話することに爲ませう、梅ちやん何時までもお泣きだよ、子供ぢやアあるまいし、構ふこたアないから胸倉に飛着いて、思ふさま振つてお遣り、何だねね、男の一疋ぐらゐを持餘して……オホ、、、意氣地がないね』。

お梅が片桐の爲に活み殺しみの苦勞を重ねたことは、お駒ほど熟知つてゐる者はない、又それだけ深く同情を寄せてゐる者は無い。その確かな記臆へ熱い涙をふりかけて、流暢な舌先に過去一年に近いお梅の苦心、貞節、難難、奪闘、それらを眼の前に見るが如く、明白に、遺憾なく說き明して聞かせた。

聽いてゐる義卿の首は重くなつて、次第に俯くかと思ふ裡に、その眼からほろ〳〵と落涙して、時々得堪へぬ思を四股の戰慄を見せるのであつた。

『おゝ、濟まん、實に濟まん』とお駒の言葉が畢るのを待つて、潤み聲を墜す下から、正しくお駒の前に兩手を突いて、始めて承はる其許の義心、片桐義卿の肺肝に徹してござる、此の御恩は未來永劫忘却は仕らん、か、か、辱けない』と涕を啜る。

『何の、お前さん、そんな事を言はれる筋はありやアしません、いはゞ此方から出過ぎたおせつかいを爲たんですもの』とお駒は謙遜して『それは爾と旦那ね、最う一遍娑婆へ出て、男前を見せて遣る了簡は、お前さんに有りませんかい、と聞くまでもない、是非爾して貰はなくつちやアお梅さんの苦勞甲斐もなし、又た妾にしたところで百日の說法何とやらだから、最う何んにも被仰らずに妾の船に乘つてお歸な、ね、可いでせう』と社祠の前を見渡して、愚闘々々してゐる中に、陣屋の手們にでも盛返された日には、此方が十人足らずの小勢だから、今度こそは可厭でもお陀佛だ、さア、胸が据つたら直とお立ちよ、今日は東の順風で日和も好し、海も凪いでゐるッてねから、一ッ飛に三宅島へ漕ぎつけませうよ、いゝッてばさ、後は妾が引受けらアね舟も出るばかりに爲てあるんだから、ね、爾なさいよ』。

熱心に勸め立てるお駒の胸中には、片桐を救ひ出した後の成算も、覺悟も確然と描かれてあつた。けれども義卿は頑乎として首を掉つた。

『いや、折角の御厚意ではあるが、義卿は此度一寸も動きたうはござらぬ』。『おや、何故ね！』

『汚れた世の風に當つて、憖じいに人を騷がすよりは、凡ての野心を抛つて島守の詫しい生涯漁夫や蜑の小兒をあつめて、砂を手本に字を習はして居つた方が、遙かに愉快ぢや、頓ては此の島の土と消ねて』と西の空を凝然と睨んで『く、く、君側の姦を屠ふ鬼、鬼、鬼となるでござらう、ムー』。

その呻き聲に一種の力！白い齒をきり〳〵と切つて、拳を掴んで、炎のやうな息を吐く、まことに其の鬼！鬼の如き骨立亂髪の姿は、微闇い古廟の黑い扉に映つて、凄風颯として吹き揚るかのやう、流石のお駒も慄然とした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

いかに慫めても應ずる氣色がないので、お駒は失望と憾とを船に乘せ、乾兒を引纏めて八重根港を出帆した。陣屋ではそれと知りつゝ、混雜と無人とに妨げられて追擊することが能きなかつた。お駒は下田に上陸すると、直ちに韮山縣へ自首して出る決心であつた。

お梅は島に殘つた、勿論良人の側に仕へて、苦痛も死も供にする覺悟、出帆の折は良人を扶けて海岸の崖に上り手拭を打振り〳〵、船の影の豆の如くに薄れ行くまで、泣いて泣いて、泣

聲の嗄るゝまでお駒の名を喚んでゐた。

時は明治三年七月十五日、島に盆踊の大鼓の音！

發行者隆文館の主人白す

本書の後扉は『**横山花子**』と題して、引續き弊館より發行すべし、可憐薄命なる主人公の花子は、この先甚麽に成り行くであらうか、多艱多恨、終始涙なりし其一生涯に於て、奇趣横生波瀾層出とも形容すべき、最も變化と興味多き時代は、實に本編より以後の事に屬せり、五彩艶麗濃淡粗密、恰も繪を見るが如き作者の靈筆は、是より一轉して美人花子が、花も盛りの十九歳の春に起して、愈々將に全編の最佳境に入らんとす、甚麽にこれより彼女が更により險惡なる浮世の波風に揉まれ〳〵て、一浮一沈、遂に悲慘さる最後の運命に到着する、愈々出て愈々妙なる彼女の經歴は、愴痛淒哀、實に一場の大悲劇なり、乞ふ、其最後の幕まで見屆けられんことを希ふ。

千里眼（續編）了

大正二年六月二日印刷
大正二年六月七日發行

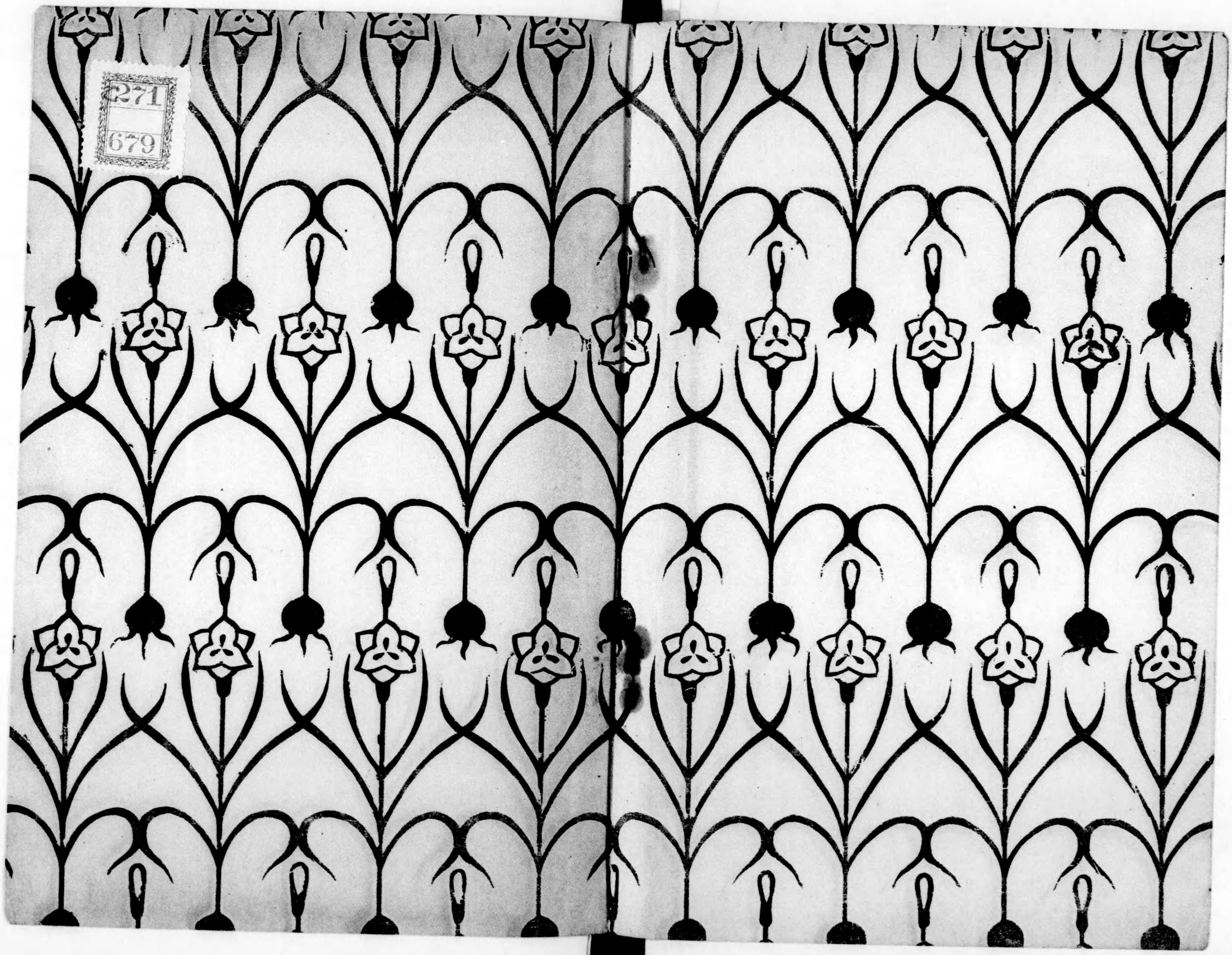
（定價五十錢）

著者　渡邊默禪
發行者　大阪市南區鰻谷仲之町二百二十四番屋敷　樋口源次郎
印刷者　大阪市西區阿波座四番丁九十三番屋敷　福西松太郎
印刷所　大阪市西區新町北通一丁目五十番地　河上貞次郎

複製不許

（千里眼續編奥附）

發賣元　大阪市南區三休橋鰻谷南へ入西側
樋口隆文館
振替口座大阪八七九七



271
679

終